

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 10 日現在

機関番号：32692

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：23890221

研究課題名（和文） 肢体不自由児施設での性と生の教育プログラムの構築に関する研究

研究課題名（英文） Development of educational program called " Education of Sexuality and Life " for children with physical disabilities

研究代表者 寺本 正恵 (TERAMOTO MASAE)

東京工科大学・医療保健学部・助手

研究者番号：40614623

研究成果の概要（和文）：

施設で生活する 3 歳から 18 歳の肢体不自由児を対象に、障害や生い立ちを踏まえつつ豊かなセクシュアリティを育むことを目的とした「性と生の教育プログラム」の開発に取り組んだ。実際に施設の状況や、子どもの障害・生い立ちの実態を明らかにしたうえで、性と生の教育プログラムを構造化し実施した。プログラムの評価には、対象児からの聞き取り調査を行った。そこでは、＜自己認識の気持ちの変化＞をきっかけに“性・生”に対する肯定的な気持ちの変化を生じていることや、「性と生の教室」が自己の障害や家庭環境に目を向ける契機にも成り得ることが明らかになった。他職種間でのプログラム評価では、障害・生い立ちの告知をどのタイミングで、どのように行う必要があるのかなどの議論が生じた。

研究成果の概要（英文）：

I worked on development of educational program called " Education of Sexuality and Life " for children with physical disabilities from age 3 years old to 18 years old who live in facilities aiming at cherishing their "rich sexuality" while being based on their backgrounds or experience of obstacles.

After researching the actual conditions and problems of the facilities and clarifying the children's facing obstacles and their personal backgrounds, I constructed the original educational program which approaches to bring up those children's "rich sexuality" and practiced it in the facilities.

Interviews from candidate children were held as the evaluation of the program.

From those interviews, it became clear that having changes of self-awareness feelings could lead to having self-affirmative feelings to their sexuality and life, and the program could also give an opportunity which turns eyes to their self disabilities or facing obstacles or family environment.

By evaluation between other occupational descriptions, the arguments about "when is the best-necessary timing to have the class" and "how to tell the children about their disabilities or their personal backgrounds" was arose.

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|---------|-----------|---------|-----------|
| 2011 年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 2012 年度 | 300,000 | 90,000 | 390,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：生涯発達看護学

キーワード：肢体不自由児・性（性）教育 肢体不自由児施設

1. 研究開始当初の背景

肢体不自由児施設で生活をしている子どもの中には、肢体不自由の他に精神発達遅滞を併発している子どもも多く、成長に伴う身体の変化を理解することが困難な場合が多い。また家庭の養育困難や虐待を理由に長期入園をしている子どもには、両親との愛着形成に複雑な問題を生じている場合がある。これらの背景を持つ子どもたちには、様々な「性と生における発達課題」が実際に生じていた。

2. 研究の目的

肢体不自由児施設で生活する子どもの性（生）の実態を把握し、また発達支援側の性（生）の実態も明らかにした上で、療育やアドボカシーの視点を基盤とした性と生の教育プログラムを構築し、その有効性及び妥当性、および限界について考察をしていく。

3. 研究の方法

(1) 施設で生活する肢体不自由児に関わる多職種とのディスカッション及び、文献検討により独自の「性と生」教育プログラムを作成する。

(2) 性教育プログラムの実施を、対象児別、テーマ別に複数回実施する。

教育プログラム対象：3歳～18歳の男女
36名

(3) 「性と生」教育プログラム実施と同時に、子ども達への聞き取り調査を行い、プログラムの評価を行う。

①調査対象：言葉や文字盤で気持ちが言語化できる学童期・思春期の子ども13名

②研究方法：半構成～構成的面接法

③聞き取り内容（例）：

- ・「性と生の教室」で印象的だったこと、役に立っていることは何か。
- ・プライベートゾーンとはどこかなどの知識の確認

(4) 聞き取り調査の結果を基に、プログラムの有効性・妥当性を考察し、プログラムの修正を行っていく。

方法：

①聞き取り調査の結果をまとめる

②プログラムの修正を行い、性と生の教育専門家の研究会で修正された模擬授業を行う。

③模擬授業の内容を基に、プログラムが子どもの認知レベルや障害レベルに適しているか、内容は科学的根拠に基づいているか等を話し合う。

(5) 性と生プログラム作成

作成期間 2011年4月～5月

①施設で生じている性（生）の問題事例を施設職員とともに行動分析ABC表等で分析した。また、対象児のADL（日常生活動作）を、入浴時、排泄時、更衣時に評価を行った。対象児のシートを作成し、身体障害や知的レベル、養育環境の情報整理を行った。

【生じている性（生）の課題とその背景】

| 性（生）の課題 | 課題の背景 |
|--------------------------|--|
| 月経や射精の悩みを生じている | 障害による関節可動域が制限され、セルフケアに限界を生じている。浣腸などの医療的ケアにより、勃起や射精が不随意に起こる |
| 身体介助に羞恥心が伴う | 軟膏の全身塗布や排泄介助等を受けなくてはならない思春期の子ども |
| プライベートゾーン（性器+唇）を無防備に露出する | 介助者が少ない中での共同生活 第二次性徴した自身の体への戸惑い |
| 自己肯定感が低い | 生い立ちや障害と向き合うことに苦痛を感じ自暴自棄になる |
| 他者との距離がうまく保てない | 愛着形成がされていない 他者の気持ちを理解する上で認知に障害がある。 |

②障がい児教育・福祉・医療に携わる方、肢体不自由児とディスカッションを行い、問題や課題を構造化、介入すべきコアに付随する要素を抽出した。

③肢体不自由児・精神発達遅滞児・被措置児童に対して実践されている性（生）教育プログラムを参考に、抽出された要素にアプローチできる独自の「性と生の教育プログラム」を作成した。

(6) 性と生の教育プログラムの実践
 ①～③の情報を基に、実践を試みた。
 実践期間：2011年4月～2012年3月

①講義での性と生の教育

- ・対象児…研究協力が得られたA施設の
 幼児～思春期肢体不自由児。
- ・クラス編成…性別やADL、知能、年齢別
 に編成し実施
- ・使用教材…パワーポイント・胎児人形
 パネルシアター・性感感染症実
 験用具等

- ・使用教室…A施設の会議室・食堂等

- ・実施留意…1回講義30分～1時間、お
 やつ等を用意し和やかなムードで行う。
 担当職員と事前に打ち合わせをし、教育
 中の子どもの受講サポートや子どもの
 反応を把握してもらう。実施後に、個別
 ケアが必要な場合は、その担当職員と行
 っていく。

②施設環境・日常生活を援助する職員に対す
 る性と生の教育

- ・パーテーションの作成をし、プライベート
 エリアを保障できる取り組みを行っ
 た。
- ・排泄介助・更衣介助・入浴介助において
 職員間で意見交換を実施、ケアの統一化
 を図った。
- ・職員に対して、性と生の教育のデモスト
 レーションを行った。

【性と生教育プログラムのグループ編成
 とテーマ】

| 対象 | 障害 | テーマ |
|----------------------|---|--|
| 全員 | 重症心身障 害児も含む | a. プライベート ゾーン b. 命の始まりか ら誕生まで |
| 身体介助 が必要な 小中学生 | 言葉・ジェ スチャーで 意思表示 中度～軽度 精神遅滞 | a. b. c. 私たち（俺た ち）進化中 |

| | | |
|-------------------|--|--|
| 自立を 目指す 中高生 | 単独外出可 能～入浴・ トイレ等の 部分介助が 必要。自立 に向けトレ ーニング 中。 軽度精神遅 滞～ 境界型知能 | a. b. d. 障害を持って 生きるみんな へ e. ガールズ（ボ ーイズ）トーク f. 恋愛シミュレ ーション |
|-------------------|--|--|

【テーマ内容】

- a…性器+唇をプライベートゾーンといい、
 自身で守る学習を行う。
- b…自分がどのように存在し生まれてきた
 のかを劇やパネルシアターで学習する。
- c…第二次性徴をゲームなどを取り入れ説
 明し、障害に応じたセルフケアを伝える。
- d…脳性麻痺や先天性疾患など、障害を持
 って生まれ生きるまでの頑張った話などを伝
 える。
- e…性について、気になっていることや悩ん
 でいることなどを子どもを中心にお互いに
 話合う。人との関係とスキンシップについ
 ても考える。
- f…恋愛の流れの中で、デートDV・性感
 感染症・妊娠のリスクについて学び、相手も自
 分も思いやる知識や方法を学ぶ。

4. 研究成果

(1) プログラムの評価…子どもの聞き取り
 期間：2011年 4月～5月

①研究参加者の概要

- ・年齢…8歳～18歳の13名
 (男児5名 女児8名)
- ・疾患…脳性まひが多く、大島分類7～23。
- ・家庭環境…ほとんどが親との関わりが
 疎遠又は面会制限があり。

②研究方法および分析

- ・半構成的面接法を用い、性と生の教育プ
 ログラムの感想や、性と生についてどの
 ように気持ちが変わったのかを明らか
 にすることを目的にインタビューを行
 った。インタビュー時間は30分～1時間
 程度であり、妥当性を測るため、性教育
 に直接携わらなかった職員がインタビ
 ューを行った。
- ・教室受講したことで言動変化が生じた
 と捉えられる内容を、看護記録から抜粋し
 データとして加えた。
- ・データは質的機能的分析法を用い、デー
 タより意味のある文節をコード化した。
 結果、44文節の中から、12カテゴリー
 に分類し、5コアカテゴリーが抽出さ
 れた。

③結果

「性と生の教室」による子どもの気持ちの変化として、命の始まりから成長した自分・障害と共に生きている自分への気づき等＜自己認識の気持ちの変化＞を始め、＜自己の体への気持ちの変化＞＜性行動に対するセルフケア意欲の変化＞＜他者との関係における認識の変化＞の4つに分類することができた。インタビュー対象児の9割に＜自己の体への気持ちの変化＞から＜性行動に対するセルフケア意欲の向上＞がみられ、さらに自立を目指す中高生7割に＜性行動に対するセルフケア意欲の向上＞から発展し、＜他者との関係における認識の変化＞がみられた。また＜自己の障害や家庭環境における思いの表出＞が自立を目指す中高生の7割に見られていた。

④考察

いずれの子どもにも＜自己認識の気持ちの変化＞をきっかけに「性・生」に対する肯定的な気持ちの変化を生じている傾向があり、「自己肯定感」を育むアプローチが、「性と生の教室」において重要であることが示唆された。また、思春期になると「性と生の教室」が自己の障害や家庭環境に目を向ける契機にも成り得ると考えられた。

(2) プログラムの評価…模擬授業の講評

平成24年8月に、「人間と性」教育研究協議会夏季セミナーにて、教育プログラムの模擬授業を行い、特別支援学校教員、養護教諭、心理士、栄養士、医師、助産師、児童養護施設職員などの多職種から助言等を頂いた。ここでは、肢体不自由児施設で生活する子どもに関わる他職種との連携をより強化していくことの必要性や、セクシュアリティを育む為の基盤となる「障害告知」「生い立ちの告知」をどのタイミングで、どのように行う必要があるのかなどの議論が生じた。子どもの求めるニーズに沿いつつ、子どもにとって最善のアプローチ方法を今後も検討していく。

(3) 今後の展望

今後は、施設で生活する子どもの中でも思春期に焦点をあて、障害受容や生い立ちの整理をどのように行いつつ二次性徴する体へ適応し、自身の性を生きて行くのかを、思春期の時期に施設で生活をしてきた成人へのインタビュー調査から明らかにしていく。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計1件)

①寺本正恵(2012) 肢体不自由児施設での「性と生の教室」の取り組み～学童期・思春期の長期入園児を対象とした性教育後の気持ち

の変化～、療育、第53号 70-71、日本肢体不自由児協会。査読無

[学会発表] (計3件)

①2012年8月5日～6日

寺本正恵 肢体不自由児施設での性と生人間と性教育研究協議会 分科会 性教育模擬授業の発表 山口大学 山口県

②2011年10月20日～21日

寺本正恵 「性と生の教室」の取り組み～学童期・思春期の長期入園児を対象とした性教育後の気持ちの変化～
第56回全国肢体不自由児療育研究大会
テトリアくまもとビル 熊本県

③2011年7月31日

寺本正恵 肢体不自由児施設で生活する子どもと共に作り上げる「性と生の教室」
全国障害者問題研究会分科会 ライフステージを貫く実践と課題
四天王寺大学 大阪府

[図書] (計1件)

①寺本正恵 (2011). 生き生き・伸び伸びみんなで「性」を育てたいな. 季刊 **SEXUALITY**, No053.October,094-101,エイデル研究所:東京.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

寺本 正恵 (TERAMOTO MASAE)
東京工科大学・医療保健学部・助手
研究者番号: 40614623